研究室だより

人事

植田麦 助教、三月三十一日をもって退職。
寺師香織 助手、三月三十一日をもって退職。

訃報

平成十二年三月まで、大東文化大学にご栄転なさるまで本学に在籍された、名誉教授の田中有（東竹）先生が、平成二十三年一月二十九日、七十四歳でお亡くなりになられました。先生は書家として著名で、読売書法会常任理事・謙慎書道会常任理事等をお勤めでした。

本学では学生部長をお勤めになり、より良い学生生活を影ながらご支援いただきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

研修旅行

【学部】

平成二十二年九月十五日（水）～十七日（金）
奈良・京都
引率　池田三枝子教授

上代文学基礎演習を受講する学生を中心として、二十五名が参加した。折しも平城京遷都一三〇〇年ということで、平城京およびその前後の旧都を尋ね、またその当時の文化施設や遺跡をたどった。

【大学院】

平成二十二年九月十五日（水）～十七日（金）
奈良・京都
引率　植田麦助教

日本語日本文学研究を受講する大学院生を対象として、学部の旅行とあわせて開催した。天理図書館での貴重書閲覧、奈良時代の文化財の見学など、貴重な経験をすることができた。

特別講演会開催

平成二十二年度　国文学科特別講演会
平成二十二年十月二十九日（土）午前一時三十分～二時三十分
香雪記念資料館　一階大教室
手妻の愉しみ　―江戸文学と奇術―
講師　藤山新太郎先生（東京イリュージョン）

大学院研究会開催

平成二十二年度後期大学院文学研究科国文学専攻研究会

平成二十二年十二月十一日（土）午後二時～午後六時三十分

Ｉ館124教室

【研究発表】

大伴坂上郎女の「言」考　―「中言」と「愛しき言」を中心に―

博士前期課程1年　日野恵理子

大伴家持「庭中花作歌」研究

博士前期課程1年　清水典子

「老人」と「（お）年寄（り）」の使い分けに関する一考察

博士後期課程2年　ポロンスカイテ・ユルギタ

「こう」の分類に関する一考察

博士前期課程1年　近悠美

【講演】

佐藤春夫と大正期の想像　河野龍也　専任講師

中世末期日本語の時間表現　―体系主義的アプローチの有効性―

福嶋健伸　専任講師

〈編集後記〉

前号にくらべて、御覧のように、雑誌として質量ともにやや厚みを取り戻すことができました。過去数年に遡ってみると、執筆者の偏りは否めず、清新な風の欲しいところでありました。しかし、あらたに着任された河野龍也専任講師をはじめとして、院生の伊藤好美さん、さらに植田麦助教という、若々しいメンバーが揃ったことは、たいへん好ましく、ありがたいことです。後に続く若い方々の、一層の努力を期待したいと存じます。

ところで、次号は八〇号となります。ひと区切りということで、編集委員会では記念特大号としたいと考えております。国文学科の専任教員は全員、何らかの形態のものを掲載することになりました。会員の方々（院生、学生、OG、旧教員）にも、この際、是非ご寄稿いただきたく存じます。

執筆要領は別に記載してあります。ご参照下さい。

（横井　孝）

平成二十二年度後期号にあたる第七十九号をお届けします。今号は論文の他、翻刻紹介に加え、平成二十二年九月に行われた、万葉旅行の報告が掲載されています。万葉旅行は、本学科池田教授のほか、荒金助手と私植田が引率として参加いたしました。万葉集に歌われる故地、古事記・日本書紀に登場する神や人物を祀る社をめぐり、文学作品が単なる情報の集積ではないことを感じてもらえたと思います。

さて、私事ですが、平成二十三年三月末日をもって実践女子大学を退職することとなりました。三年間という時間が長かったのか短かったのかはわかりませんが、学ぶことは大きく、実りの多い日々でした。不甲斐ない自分ではありましたが、同僚の教職員のみなさんに支えられて、任期を終えることとなりました。新たな環境では、ここで学んだことをもとに、さらなる飛躍を目指したいと思います。

この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

（植田　麦）